

二二 日ばかり、途中で出会った二十歳の青年といっしょに旅をした。どちらから声をかけたのかは忘れたが、彼も小型の街乗りバイクに乗っており、それだけで互いに親近感を覚えたのだ。長野から来たという青年は、口数も少なく、年下のぼくに對してもぼそぼそと敬語を使って話した。ぼくが一人用テントの使い勝手の悪さを愚痴ったら、自分のテントで泊まりませんか、と言うので好意に甘えることにした。道連れができたことがうれしく、気も大きくなつて、出会う若者たちにもいつも声をかけた。ロードバイクで一人旅をしている大学生と話したら、チューブ三本積んで一日二百キロ走る、と言った。「すごいなあ。上には上がいますねえ。」

長野の青年はぼくにそう言つて、自転車の大学生にいつしよにテント泊しないかと誘つた。大学生はその気になつたが、「でも、ぼく臭いですよ。」と一旦は遠慮した。そんなもん関係ないと二人で言つたら、荷物を下ろしてテントに入つてきた。三人で横になった。野宿基本で風呂にも入らずひたすら漕ぎ続けているので仕方ないが、大学生は確かに臭かつた。長野の青年もぼくも決して言葉には出さず、表情にも気をつけてはいたが、なるほど大学生の言うとおりだ

と一瞬の沈黙で了解し合つた。大学生は、そのわずかな瞬間で察してしまつた。「ねつ、臭いですよね。やっぱりぼく行きます。」

そう言つと、気を遣うよりその方がいい、というようにさつきと荷物を抱えて出て行つた。翌日も長野の青年と共に走つた。厚岸に近い厚床で夕方になつたので国道沿いの住宅で聞いてみる。白いつなぎの作業着を着た中年の男性が出てきて、学校の校庭で張つたらいいだろう、と言つた。学校はすぐ隣にあり、男性はその小学校の教頭先生だつた。校庭の隅でテントを張つていたら、さつきのつなぎにゴム長靴、野球帽という出で立ちで、教頭先生が手伝つてくれた。いくらか薪も提供してもらつたので、日が暮れてからキャンプファイヤーのまね事をした。「氷の下の魚、と書いてね、こまいつて読むんですよ。ここの土産でね。」

教頭先生が差し入れてくれた干物の魚を火で炙つた。ずいぶん硬かつたががじつたりしやぶつたりしているうちにほんのりとうま味が感じられた。たいした会話もしなかつたが、ちよろちよろとした炎を三人で見つめているのは楽しかつた。行きずりの旅人をもてなしてみたいものだ。あの時の教頭先生は楽しかつたに違いない。



専業ババ奮闘記(その2) 70

木幡智恵美

義母の異変(2)

「突貫婦人つて言われてね」と、義母からよく聞かされた。皮膚科に治療に通つた時、医者からの指示以上のことをして早めに治したので、そう言われたらしい。年をとつても頑張り屋で、膝が痛くて引きずりながらも、「歩かんといよいよ歩けんやになるけん」と、手すりを支えに、すり足でゆつくりと歩いてた。そんな義母も、百歳が近づくと、「トイレまでが遠くてね。何とかならんんだらか」と言い出した。ベッドの横にポータブルトイレを据えてみたが、そこにたどり着くまでに漏らしてしまうことが何度もあり、引き上げた。

圧迫骨折をし、車椅子で移動するようになると、さらに脚力は弱つてくる。回復して歩き出しても時間がかかるため、途中で早くも出てきて、「間に合わんといけんけん、椅子で運んでもらうか」と言うことが多くなつた。以前、夫が片腕を支えていたにもかかわらず、いきなり膝がぐつときて転倒したこともある。股関節でも折れたら大変だ。用を足したくなつたら襖を叩いて合図するようにお願いした。日中は寝ていることが多くなり、時間を見ては部屋を覗き、「トイレはいいですか」と聞く。「行つちよかか」と言われれば、車椅子で連れて行つた。大概はこちらが声を掛けるが、三十分おきにドンドンが鳴り、車椅子でトイレに運ぶという日もあつた。

夜は、「紙おむつの中でしてください。寝たきりの人は皆さんオムツの中でしてもらえますから」とお願いした。ところが、それにはなかなか慣れることができなかった。どうしてもオムツを外してしまふ。オムツの周りをガムテープでぐるぐる巻きにしても、ガムテープごと外す。ベルトを買つてきて留めてもだめだつた。シーツは洗えば済むことだが、夜中のドンドンが堪らない。本人は目が覚めた時が朝だと思つているので、悪気はない。しかも、用があつたら、襖を叩いてくださいと言つたのは私だ。

そして、朝になると、脱いだる時は片づけをし、「トイレはどうします」と聞いて、行くと言われれば連れて行き、着替えをさせ、汚れ物があれば洗濯機へという毎日。ところが、八月に入つて、あれつと思うことがあつた。パットの一部分がピンクに染まつているのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。アフガニスタンから敗走したあとのバイデンの国連演説を朝日新聞は「政権発足以来、最も厳しい局面を迎える中で行われ、挽回を目指すもの」と報じていた（9月22日朝刊）。

年金生活者 演説は熱い戦争、リアルな戦争の余地が今後いつそう縮小し、世界規模の戦争だけでなく、局地戦さえも冷たい戦争、バーチャルな戦争に転化していくことを示すものとなった。

「我々は絶え間なき戦争の期間を終え、絶え間なき外交という新たな時代の幕を開いている」。バイデンのこの宣言の中にある「絶え間なき戦争」が東西冷戦後に相次いだ熱くりアルな局地戦、すなわち湾岸戦争、アフガニスタン戦争、イラク戦争などを指しているとすれば、「絶え間なき外交」とは今後いつそう広がる冷たくバーチャルな戦争を指していると言いうことができる。

彼は念を押すように「米国の軍事力行使は最後の手段であり、最初であつ

30代 バイデン政権は中国に対抗して英豪とAUKUSと名づけた軍事同盟を結び、豪の原子力潜水艦の開発の支援を表明するなど戦う気満々にも見える。

年金 アメリカが高性能の武器をそろえ、ときには同盟国に提供するのは、実際にそれを使いたい、使わせたいからではなく、使わなくて済むようにしたいからだ。

現在の世界では、熱い戦争を避けるために、軍備を増強して冷たい戦争を繰り広げるといふ逆説的な事態が常態化している。言い換えれば、アメリカがこの20年間に励んできた軍備の拡張は、熱い戦争をする気力の衰えをあらわしている。

それは国民の厭戦気分の広がりと言いつてもいい。アメリカABCテレビとワシントン・ポストの最近の世論調査では、アフガニスタンからの軍の撤退を支持する割合は77%にのぼっている。ナポレオンが実証したように、国民が国家を自分たちのものと

てはならない」と語っている。東西冷戦を境に世界規模の熱くりアルな戦争が不可能となり、これまでベトナム戦争に代表される局地戦がその代替として行なわれる時代が続いた。それももうこれからは終わりにして、局地戦も冷たくバーチャルな戦争にしてしまおうというのがバイデンのメッセージだ。

戦争の冷温化、バーチャル化は軍備を必要にはしない。むしろ絶えざる軍備の更新を迫る。抑止力を競う戦いなので、力の均衡にほころびが生じないように常に神経をとがらせなければならぬ。その経済的な負担はかつての熱い世界戦争以上のはずだ。もし中国との対立が「新冷戦」にエスカレートするようになれば、その負担は耐えがたいほどに増えるだろう。だからバイデンは演説で「我々は新冷戦や、世界を二つのブロックに分けることを望んではいない」とことわるのを忘れなかつた。

30代 アフガニスタンでの敗北の正当

考える民主制の国家は戦争に強い。そのぶん国民の戦意が失われたとたんに弱くなる。

30代 それでも中国は台湾の武力統一に踏み切るのではないか、尖閣諸島に軍隊を上陸させるのではないか、といった懸念は消えず、アメリカは戦う用意を捨てたわけではないだろう。

年金 たしかに中国は台湾の武力統一を否定したことはない。しかし、それ

化にも聞こえる。

年金 9・11後のアフガニスタン戦争、イラク戦争のほとんど唯一といつていい成果は、アメリカの戦争遂行能力を著しく低下させたことだ。日本人にとって太平洋戦争のほとんど唯一の成果が日本の戦争遂行能力を封じ込めた新憲法だったように。

自国の戦争遂行能力の低下を自覚し、それに合わせて従来の外交を一変させたのがトランプだった。北朝鮮とは戦火を交える代わりに同国を事実上の核保有国と認める取引をして、核実験や長距離弾道ミサイルの発射実験をやめさせ、東アジアの緊張を緩めた。中国と華々しく対立して見せたのは、同国を戦争の相手ではなく、取引と競争の相手とするという宣言だった。それをバイデンも引き継いだ。

アメリカの戦争遂行能力の低下は、地域によつては不安定化の要因になる一方で、長期的にはそれを上回る世界の安定化に寄与するだろう。テロの減少も含めて。

は台湾への侵攻を実行に移そうとしていることを意味しない。武力統一を否定しないこと自体が、対アメリカ、対台湾のバーチャルな戦争の作戦行動をなしている。それは熱い戦争、リアルな戦争の代替行為であり、実際の武力侵攻を回避するためのものと考えることができ。

中国が尖閣諸島の周辺に執拗に海警局の公船を送り込んでくるのは、島と周辺海域の実効支配を実現するためのステップではなく、いわば「エア実効支配」「バーチャル実効支配」であり、リアルな実効支配の代替行為と考えることができる。これもまた対日本の冷たい戦争、バーチャルな戦争の一環をなしている。

そう考えると、偶発的な衝突以外に意図的な衝突が引き起こされる可能性は限りなくゼロに近いと言わなければならぬ。ただし、そう言えるのは、意図的な衝突への懸念が常に存在しているからであり、そこに冷たい戦争、バーチャルな戦争の矛盾がある。

ニュース日記 802
中村 礼治

これからの戦争